

「なっちゃんは、ほっとけない」 第2話

水瀬真理佳

教 頭	へ登場人物へ											
	本 田 夏 海	（ 1 6 ）	本 田 家 の 長 女 、 高 校 2 年 生									
	本 田 冬 馬	（ 1 3 ）	本 田 家 の 長 男 、 中 学 2 年 生									
	本 田 春 樹	（ 8 ）	本 田 家 の 次 男 、 小 学 2 年 生									
	本 田 隆	（ 4 0 ）	亡 き 夏 海 た ち の 父 親									
	本 田 陽 菜	（ 3 8 ）	亡 き 夏 海 た ち の 母 親									
	西 山 凜	（ 1 6 ）	夏 海 の ク ラ ス メ イ ト									
	藤 井 拓 海	（ 1 6 ）	夏 海 の ク ラ ス メ イ ト									
	橘 龍 太 郎	（ 1 6 ）	夏 海 の ク ラ ス メ イ ト									
	佐 野 聖 也	（ 1 6 ）	夏 海 の ク ラ ス メ イ ト									
	小 勝 由 利	（ 3 0 ）	養 護 教 諭									
	澤 村 千 恵	（ 6 0 ）	弁 当 屋 の 店 主									
	小 林	（ 1 6 ）	夏 海 の ク ラ ス メ イ ト									
	佐 藤	（ 1 6 ）	夏 海 の ク ラ ス メ イ ト									
	西 山 秀 樹	（ 4 6 ）	入 谷 高 校 の 校 長									

○入谷高校・資料室

同級生の西山凜（16）、藤井拓海

（16）、橘龍太郎（16）、佐野聖

也（16）が入ってくる。

室内には、机や椅子、電気ケトルが揃い、漫画や青年誌、ゲームも置いてある。

龍太郎「なあ凜。さっきのアレ、どういう風の吹き回しだよ。優等生となんかあった？」

聖也「カゼの引き返し？　凜、カゼ引いたのか？」

拓海「そっちの風邪じゃなくて、風の方な。珍しいこととか思いがけないことがあった時に使うんだよ」

聖也「おう！」

凜「：：別に。ただの気まぐれだけど」

龍太郎「学校中の噂になってたぞ」

凜「噂？」

と、顔を顰める。

龍太郎「転校生と西山はデキてるって」

聖也「それオレもきいた！ 2人が保健室で
ヤッてたとか」

凜「……ハッ、くだらねえ」

拓海「へボソツと」彼女、めんどくさいこと
に巻き込まれないといいな」

凜「……」

○同・廊下

夏海、弁当を持って歩いている。

廊下にいる生徒たちが夏海を見ながら
コソコソ話す。

生徒A「おい聞いたか？ あの西山が言いな
りになってるらしいぜ？」

生徒B「一体どんな手使ったんだよ」

生徒C「やらせたらしいぜ」

生徒B「大人しそうな顔してんのかな」

生徒C「ばっか。ああいうやつほどベッドの
上だとエロいんだよ！」

夏海M「へなんかすごく視線を感じる……も
しかして朝焼いた魚の匂いついちゃって

る？」

夏海、肩を縮こませて歩いていると、目の前に佐藤と小林が現れる。

夏海「すみません」

夏海は避けようとするが、足で道を塞がれる。

佐藤「ちよっとツラ貸せや」

夏海「え……？」

○同・階段の踊り場

角に追い詰められる夏海。

佐藤「テメエ一体どんな手使ったんだよ」

夏海「……なんのお話ですか？」

小林「とぼけんじゃねえ！　なんか西山の弱み握ったんだろ！　それを吐け」

佐藤「アイツが誰かに協力するなんてありえ

ねえ！　何やった？　カネか、クスリか、やっぱ体か？」

夏海「よく分かりませんが、何か気になるな
ることがあるなら直接西山くんに聞くのは

どうですか？」

佐藤たち、狼狽えながら、

佐藤「それができたら苦労してねえんだよ！」

夏海「じゃあ私も一緒に付き添いますよ？」

小林「ああ？」

と、夏海に詰め寄る。

夏海が一步後ろに下がると階段を踏み外してしまう。

夏海「わっ！？」

宙を舞って落ちる夏海。

目をギュツと瞑って衝撃に備えるがいっつもまでも衝撃は訪れない。

聖也の声「ナイスキャッチ！」

聖也の声が聞こえて夏海が目を開ける

と、凜の腕の中にいる。

他にも聖也、龍太郎、拓海も一緒。

夏海「西山くん……！」

凜「チツ……」

凜は舌打ちをして佐藤、小林を睨み上げる。

佐藤「にっ、西山！」

凜「（不敵な笑みで）コソコソ楽しそうだな。

俺もまぜろよ」

小林「たっ、ただ話してただけだよ。俺らも

転校生と仲良くなりてえなーって。な？」

夏海「みなさん、西山くんとお話ししたっ：

：

夏海がさっきの会話について話そうと

すると、佐藤と小林が慌てて階段を駆

け降り、喋りかけた夏海の口を慌てて

手で塞ぐ。

夏海「んんっ！？」

佐藤「（冷や汗をかきながら）これから仲良

くしようなぁ転校生！」

夏海「！？」

夏海、訳も分からず握手させられる。

凜「：：おい」

佐藤と小林「はいっ！」

凜「もしくだらねえこと考えたら：：どうな

るか分かってんな？」

と、睨む。

佐藤たち、ブンブン首を縦に振る。

凜「夏海、行くぞ」

夏海「あっ、はい！」

夏海、凜たちについていく。

○同・資料室前

聖也、部屋のドアを開ける。

聖也「ようこそオレらのアジトへ！」

龍太郎「俺ら以外のやつ入れんの初めてだな」

夏海「いいんですか？ 私なんか入って」

聖也「いいのいいの。だって凜がOKしたん

だし。な？」

凜「……早く入れよ」

夏海「お邪魔します！」

○同・資料室の中

龍太郎「ここ座んな」

夏海「ありがとうございます」

と、椅子に座る。

各々昼ごはんを食べ始める。

夏海「さっきはありがとうございました。西

山くんたちが通りがからなかったら今頃救

急車で運ばれてたかもしれません」

凜は無言ですかしている。

すると聖也と拓海が凜の方を見て、

聖也「へ笑って」なにカッコつけてんだよ」

拓海「へ笑って」色んなやつに聞いて回った

もんな？」

夏海「えっ？」

凜「……お前ら1回黙れ」

と、額に怒りマークを浮かべる。

龍太郎「そういえば拓海って優等生と話すの

初めてじゃね？」

拓海「そうだな。てかその優等生って呼ぶの

やめてやれよ」

聖也「じゃあなっちゃん？」

拓海「急に距離近いな」

夏海「いえ、嬉しいです！」

龍太郎「いいねなっちゃん！」

夏海は拓海の方を向いて、

夏海「改めまして本田夏海です。よろしくお

願いします」

拓海「俺は藤井拓海。よろしく」

聖也「拓海はな、いつも字がこんなちっさい

ムズそうな本ばっか読んでんだよ」

拓海「本なんてだいたいあんなもんだから」

龍太郎「もーらい！」

と、聖也の弁当の唐揚げを取って食べ

る。

聖也「オレの唐揚げ！ 取つといたのに！」

龍太郎「取つとく方が悪いんだよ」

凜「じゃあ俺も」

と、龍太郎のパンを1個取る。

龍太郎「あぁっ！ ふざけんな凜！」

拓海「お前ら昼くらい落ち着いて食えよ」

夏海、4人の様子を見てクスクス笑う。

龍太郎「そんなおかしかった？」

夏海「学校でこんな風に誰かとお昼食べるの

久しぶりなので、賑やかで楽しいです」

聖也「やっぱ西高でイジメられてたのか！？」

夏海「いえ。休み時間はその日の宿題と予習復習をやるの時間にあててたので。お弁当は10分で食べてました」

龍太郎「スツゲエな。それであれだろ、学校終わったら塾でお勉強だもんな」

夏海「いえ、塾には行ってませんでした。バイトもしてましたし、なるべく弟たちのそばにいたかったのだから」

龍太郎「え、弟？」

夏海「はい！　中学2年生と小学2年生の弟がいます」

聖也「じゃあ食べ盛りの男って……？」

夏海「弟たちのことです！」

聖也「なんだ――」

龍太郎『なんだ――』じゃねえ！　シング
ルマザーらしいとか言ってたのどこのどい
つだよ――

龍太郎が聖也の頭を叩く。

夏海「でも、それもあながち間違いでもない

「かもしれない」

聖也「？」

夏海「4年前、両親が事故で亡くなって。そ

れからは私が2人の保護者代わりです！」

龍太郎「へ申し訳なさそうに」ごめん、なん

か」

夏海「気にしないでください！」

聖也「そっか」じゃあ放課後遊んだりもでき

ねーんだな」

夏海「そうですね。学校以外の時間はひたす

らバイトです」

拓海「何のバイト？」

夏海「お弁当屋さんとかコンビニで。コンビニ

にはよく西山くんも来てくれるんですよ」

拓海「3人が「え？」と凛の方を向

く。

凛「……たまたまだよ」

と、目を逸らす。

聖也「へニヤニヤしながら」はっはーん。そ

ういうことか」

龍太郎「本田さんに会いに行ってたわけだ」

拓海「まあ、今日みたいに絡まれたら危ない

し、凜が守ってやらないとな」

3人とも頬が緩んでいる。

凜「……お前らマジでいい加減にしろよ」

聖也「でも弁当屋っていいな、なんかオレ腹

減ってきた」

龍太郎「食いながら言うなよ」

夏海「良かったらぜひ来てください！ 朝早

くから夜の8時まで開いてます。安くて美

味しいんですよ」

聖也「よし、今日みんなで行こう！」

その時、部屋のドアが勢いよく開いて、

養護教諭・小勝由利（30）が入って

来る。

由利「やっぱりここか！」

夏海「由利ちゃん先生？」

龍太郎「由利ちゃん入る時はノックしてって

言ってるじゃないん」

聖也「見られちゃ恥ずかしいことしてたらど

うすんだよ」

由利、龍太郎と聖也の頭をゲンコツで殴る。

龍太郎「へ頭を押さえながら」イッテェ！」

聖也「今よりバカになっただうすんだよ！」

由利「うるさい！　いつまで経ってもなっち

ゃん来ないから心配したんだよ！　誰か

に絡まれてるんじゃないかと思つて。そし

たら……犯人はアンタたちか西山の一味」

聖也「へ目を輝かせて」なんか海賊みたいじ

ゃね！」

拓海「絶妙にダサイな」

龍太郎「うん」

夏海「すみません私がちゃんと言わなかった

から。西山くんたちは助けてくれたんです」

由利「そうなの？」

凜「残念でした」

と、由利にあっかんべえとする。

由利、容赦なく凜の頭にもゲンコツ。

凜「ッテェ」

由利「まあでも、アンタたちが一緒にいってくれれば心強いわ。ちよつかいかけようなんてバカなやつ、そうそういないだろうし。頼んだよ」

聖也「任せとけて。ちゃんとするからさ！ 凜が」

龍太郎「人任せかよ」

拓海「聖也らしいな」

凜「どーしよっかなあ。由利ちゃん俺に何

してくれんの？」

由利「アンタってやつは！ すぐそういうこ

と云う」

夏海、みんなのやりとりを微笑ましく

見守る。

× × ×

夏海「授業が始まるので私はそろそろ教室に戻りますね。今日はありがとうございました」

と、立ち上がる。

龍太郎「明日もここ来て食べば良いじゃん。

な？」

拓海「本田さんが嫌じゃなければ」

と、頷く。

夏海、顔をキラキラさせて

夏海「いいんですか！」

と、凜の方を見る。

凜「（興味ないフリをして）好きにすれば」

夏海「ありがとうございます！」

聖也「じゅぎょー頑張れよう」

と、手を振る。

夏海が部屋を出る。

○さわむらキッチン・店内（夜）

店内は客で賑わう。

ドアが開いて凜たち4人が入ってくる。

中にいた客が凜たちをチラチラ見て、

避けるように道を開ける。

聖也「（気にせず）なっちゃーん！ 来たよ」

夏海「いらっしやい！」

夏海に話しかけたのを見て、客たちが

ぎよっとする。

会計を終えた客が夏海の耳元で、

客 1 「（小声） なっちゃんあの子たちと知り

合いな？」

夏海 「はい！ クラスメイトです」

客 1 「えっ……」

龍太郎 「（愛想よく） こんばんは」

客 1 「こんばんは……」

と、逃げるように店を出ていく。

子供 「お兄ちゃんの髪の毛すごい色ー！」

と、指差す。

聖也 「カッコいいだろ」

と、オレンジ色の髪を見せる。

母親 「こら、やめなさい」

と、子供の手を引っ張ってドアの方へ

行く。

夏海 「お母さん！ おかずは大丈夫ですか？」

母親 「ごめんね なっちゃん 今日 いいの！」

と、出ていく。

老人 「なっちゃん悪いけどこれ戻しといてく

れるかい」

と、お弁当を返す。

夏海「あ、はい……」

瞬く間に客が次々と退店していく。

龍太郎「ありや……」

拓海「なんかごめんな」

夏海「いえ。みんな急いでたんですよ。（明

るく）それよりお弁当、何にしますか？

ちなみに今日のおすめはスタミナ井です」

聖也「おうまそう……！」

龍太郎「色々種類あるんだな」

すると店主・澤村千恵（60）が厨房

から出てきて、凜たちをまじまじと見

ながら、

千恵「なっちゃん……知り合い？」

夏海「はい！ 同じクラスの佐野君、橘くん、

藤井くん、それから西山くんです」

聖也「こんにちは！」

龍太郎「こんにちはだろ」

拓海「こんにちは」

凜「……っス」

千恵「（愛想笑い）あらそうなの。なんだか

……随分カラフルなのね」

聖也「アハハ！ あざーっす！」

と、体を直角に曲げる。

拓海は苦笑。

龍太郎「（あえて明るく）じゃあ俺これにし
よっかなあ。ほら、お前らも早く選べよ」

凜「俺はこれ」

それぞれお弁当をとっていく。

夏海「もう閉店だから値引きするね！」

聖也「オレ決めらんねえよ！」

と、頭を抱える。

○同・店の前（夜）

夏海「ありがとうございます！ また来て

ください」

と、凜たちを見送る。

聖也「なっちゃんこの後も頑張れよう！」

龍太郎は手を振り、拓海も軽く手を挙

げて帰っていく。

凜は何も言わず手も振らずクールに。

○入谷高校・2年A組

夏海、教室で授業を受けている。

登校している何人かの生徒は後ろの方

で好き勝手している。

凜たちはまだいない。

○同・下駄箱／廊下

凜、拓海、龍太郎、聖也が登校してき

て上履きに履き替える。

龍太郎「なあ。昨日のなっちゃん弁当めちや

うまだったよな？」

拓海「ああ美味かった」

聖也「今日も行こうぜ！」

龍太郎「あゝ……」

と、難色を示す。

拓海も苦笑い。

聖也「なんだよお。なっちゃんもまた来てっ

て言ってたぜ？」

龍太郎「まあそうだけど……」

拓海「お客さんとか店の人、あんまい顔してなかったからな」

聖也「そうか？ おばちゃん髪の毛褒めてくれたじゃん」

龍太郎「（苦笑）あれは褒めたんじゃねーって」

聖也「俺ら別に店で騒いでないし、なんも悪いことしてねーじゃん。龍と拓海は気にしすぎなんだよ。なー？ 凜」

凜、話をよく聞いていなくて、

凜「ん？ ああー」

と、言いかけると廊下の奥から校長・校長・西山秀樹（46）と教頭が歩いてくる。

西山「こんなところで何してるんだ西山！ 授業中だぞ！ さっさと教室に行け！」

と、ずんずん歩いてくる。

聖也「げ」

龍太郎と拓海も気まずそうな顔をする。

凜、唇に手を当てて、

凜「（挑発するように）シューッ。じゅぎょー

ちゅーですよ校長先生」

西山「目上の人間に向かってなんだその口の

聞き方は！」

教頭「落ち着いてください西山校長！」

西山が凜に殴りかかろうとするのを教

頭が必死に止める。

凜、何食わぬ顔で西山の横を通り過ぎ

る。聖也たちもそれに続く。

聖也「ちわーっす」

龍太郎「どもっす」

拓海、無言で軽く頭を下げる。

凜たちが通り過ぎて、西山は頭を抱え

てため息をつく。

教頭「ま、まあ学校に來ただけでも……」

しかし西山に睨まれてそれ以上話すのをやめる。

○さわむらキッチン・付近

凜たちが店の近くまでくる。

店の前では掃き掃除をしている千恵と

客が話し込む。

千恵「いらっしやい！」

客「ねえ、今店の中誰がいる？」

千恵「いないけど？」

客「良かったあ。ほら、この間来てた子たち、

あれ入谷の生徒でしょ？ また来てるかと

思ってた」

千恵「ああ……ごめんなさいね、怖がらせち

やって」

客「なっちゃんあんな子たちと一緒に大丈夫

なの？ 気をつけてあげてね」

千恵「うん、ありがとね」

客「じゃあ買って行こうかな」

千恵と客が店の中に入る時、夏海の声

が聞こえてくる。

夏海の声「いらっしやいませ！」

そのやり取りを実は店の脇で聞いてし

まっていた凜、聖也、龍太郎、拓海。

凜「……行くぞ」

と、店を背にして歩いていく。

聖也「あ、おい凜！」

聖也と龍太郎も凜の後に続く。

拓海、短く息を吐いて後を追う。

○西山家・玄関（夜）

凜が帰って来ると、西山が出て来る。

西山「部活も入っていないのに一体どこをほっ

つき歩いてたんだ」

凜「るっせーな。関係ねえだろ」

西山「関係ないわけないだろ！　いいか、お

前がどんなに拒絶しようと、俺が父親で、

お前が未成年の子供だったことに変わりには

ないんだぞ！」

凜「……今さら父親面かよ。うぜえ」

凜、無視して上がって2階の部屋へ向

かう。

西山「いつまでそうしてるつもりだ！　凜！」

ボタンとドアが閉まる。

○同・凜の部屋（夜）

凜、床にバッグを投げ、壁を背にして
ベッドにドカッと座る。

○（凜の回想）中学校・校舎裏

女子「凜、ごめんね……本当にごめん」

女子が涙をこぼしながら謝る。

凜「（辛そうに）なんで光莉が謝んだよ」

凜は女子の涙を拭こうと手を伸ばすが
女子がビクッと怯えたため、触れずに
そっと手を戻す。

（回想終わり）

○同・凜の部屋（夜）

凜「……クソが」

と、寝転がったまま壁を殴る。

○同・店内（夜）

夏海、週末のイベント用の看板を作っている。

千恵「ねえ、なっちゃん」

夏海「はい？」

千恵「あのね、ほんとにこんなこと言いたくないんだけど……」

夏海、千恵の言葉をじっと待つ。

千恵「この間来てたお友達のことなんだけど。

なっちゃんから、もううちには来ないよう
に言っていてやってくれる？ お客さんたちが
怖がっちゃってるのよ。ほら、うち週末は
イベントにも出るし、変な噂立ったら困っ
ちゃうからね」

夏海「でも千恵さん、西山くんたち見た目は
派手だけど、ほんとに優しくて、うちのお
弁当もみんな美味しいって言ってくれて……
……！」

千恵「（お願いね）」

という眼差し。

夏海、何も言えなくなる。

○ 本田家・リビング（夜）

テーブルで頬杖をついてボーッとする

夏海。

春樹がその前で宿題をしている。

春樹「できた！」

と、顔を上げる。

夏海は気付いてない。

春樹「ねえーちゃん！」

春樹、夏海の前で手を振る。

夏海「へ我に返ってーあ、ごめん」

春樹「終わった！ ゲームしていい？」

夏海「チェックするからちよっと待って」

夏海、春樹の宿題をチェックする。

春樹「ねえちゃんどうかした？」

夏海「え、なんで？」

春樹「ボーッとしてるから」

夏海「そっか。ごめんごめん」

春樹「オレが聞いてやろーか？」

夏海「春樹が相談に乗ってくれるの？」

春樹「できるし！ オレみんなからそうだん

されてんだよ。ほら、話してみろって」

夏海「んーとね。学校の友達が、ねえちゃんのお弁当屋さんに来てくれたんだけど、見た目がちよつと派手だからお客さんたちが怖がってるんだって。きつと話せば、みんな楽しくて優しい人たちだって分かってもらえると思うんだけど。何かいい方法はないかなあって」

春樹「うーん」

と、首を傾げる。

夏海「へちよつと難しかったか」

春樹「そんなのかんたんじゃん」

夏海「え？」

春樹「その友だちがこわくないってことをみんなに分かってもらえばいいんだろ？　ならねえちゃんといっしょにバイトすればいいじゃん」

夏海「うちで一緒に働くの？」

春樹「うん。そしたらおきゃくさんも、そいつがワルいやつじゃないって分かるじゃん」

夏海「なるほどねえ……」

と、納得。

春樹「へニヤニヤして」もしかして、その友

だちって男？」

夏海「うん、そうだよ……？　だって学校の

女子はねえちゃんだけだもん」

春樹、「冬馬！　ねえちゃんに男できたあ

！っ！」

と、走っていく。

夏海「ちよつと春樹！　別にそんなんじゃない

いからね！？」

と、叫ぶ。

○入谷高校・2年A組

夏海、弁当箱を持って凜たちの席に行く。

夏海「今日もお昼、一緒にいいですか？」

凜、立ち上がって、

凜「もうあそこにはくんな」

と、告げて教室を出ていく。

夏海「（固まる）え……」

夏海、助けを求めるように聖也や龍太郎を見るが、2人も気まずそうに凜の後を追う。

夏海を見かねた拓海、

拓海「俺たちとツルんでたら本田さんに迷惑かかるからさ」

夏海「どういふことですか？」

拓海「聞いちゃったんだ。本田さんのお店に

お客さんから苦情来てるの」

夏海、ハツとする。

夏海「違うんです！ みんな誤解してるだけで……！」

拓海「いいのいいの。俺らそういうのは慣れてるから気にしてない！」

と、教室を出ていく。

○同・保健室

夏海、お弁当を持って肩を落として入る。

夏海「（暗く）失礼します」

由利「どうしたの なっちゃん。今日西山たち

休み？」

夏海「いえ……」

由利、何かを察して、

由利「ここおいで」

夏海、頷いて席に着く。

由利「それで。どうしたよ その顔は」

夏海「西山くんたちに嫌な思いをさせてしま

いました。せっかく親切にしてくれたのに

……嫌われたと思います……」

由利「まさか。なっちゃんに限ってそんなこ

とありえない」

と、話を続けようとすると、保健室の

扉が開き別の教師が入ってくる。

教師「失礼します。小勝先生……（夏海を見

て）あ、本田さん！聞いたよ。最近西山

たちに絡まれてるんだって？ 変なことさ

れてない？ 大丈夫？」

夏海、立ち上がって、

夏海「（声を張って）西山くんたちは何も悪くありません！」

由利と教師、目をパチパチさせる。
夏海、ハツとする。

夏海「すみません……でも、私は大丈夫です。
ご心配ありがとうございます」

夏海、丁寧にお辞儀して荷物をまとめ
部屋から出ていく。

由利、教師のことを肘で小突く。

○同・廊下

夏海、モブに絡まっている。

生徒A「なあ、西山とマジでデキてんの？」

生徒B「俺らとも遊ぼうぜ」

生徒C「（小声で耳打ち）おい、来たぞ」

廊下の奥から凜たちが歩いてくる。夏海、凜と一瞬目が合うがすぐに逸らされる。生徒たち、凜を警戒して夏海を取り囲むのをやめて雑談のフリ。凜は夏海に目もくれず通り過ぎていく。

聖也「（口パクで）やつほー」

と、夏海に声をかける。

龍太郎もすれ違い際に「よ！」と手を

挙げ、拓海も「（小声で）大丈夫？」

と声をかける。

夏海、それぞれに小さく反応しながら、

通り過ぎた4人の、特に凜の背中を見

つめる。

生徒たち再び夏海に絡む。

生徒A「なんだよ、学校じゃ絡まねーのか？」

夏海「……」

夏海M「あれから西山くんは私と話すどころ

か、目も合わせてくれなくなった」

夏海、思い詰めた顔。

○同・廊下

歩いている凜たち4人。

聖也「なあ凜、いいのかよ。なっちゃん絡ま

れてたぞ」

凜「るせーよ。俺がいちいち助ける義理はね

え」

聖也「だけどよー」

と、納得していない。

龍太郎「もういいだろ」

と、聖也を宥める。

拓海「そのうち転校生っていう物珍しさもなくなってみんな飽きるよ」

廊下の角から由利が歩いてくる。

由利「いた！ 西山一味イイイ！ そっから動くなあー！」

由利がすごい剣幕で歩いてくる。

龍太郎「ナニナニ由利ちゃん超怒ってんじゃないん」

由利「私言ったよね？ なっちゃんのこと頼んだって！」

凜「俺はやるなんてひと言も言っただけでねえし」と、通り過ぎる。

龍太郎「由利ちゃん違うんだよ。俺らなっちゃんのために」

由利、凜の背中に向かって、

由利「へえ」。そうやって逃げるんだ。ダッ
サ」

足を止める凜。

凜「……るせーよ」

由利「入谷の白虎も所詮この程度だったんだ
ね。アンタ一体何にビビってるわけ？」

拓海「由利ちゃん、そのへんで」

と、由利を止める。

凜、拳を握りしめて、

凜「……俺が関わったら迷惑かける。アイツ
になんかあったら責任とれんのかよ、とれ
ねえだろ！　（本気のトーン）何もしら
ねえくせに、口挟んでくんない」

と、言い残して歩いていく。

由利、凜の背中に向かって、

由利「アンタが一体過去の何と重ねてるのか
知らないけど、なっちゃんはちゃんとアン
タのこと見てる、向き合ってる、信じて
る！　アンタたちのことバカにする教師に、
『西山くんたちはそんな人じゃない』って

ハッキリ言ったよ」

聖也「えっ」

龍太郎「なっちゃん……」

拓海「……」

凜は驚かない。

由利「確かに、何もないとは言いきれない。

だからアンタがそばにいなさいけないん

じゃないの？」

凜「……簡単に言ってんじゃないよ」

凜、拳を握りしめて歩いていく。

3人、由利の言葉を噛み締める顔。

○同・2年A組教室

夏海、授業を受けている。

チラッと後方を見るが凜たちはいない。

夏海「（小さく）はあ……」

○本田家・玄関（朝）

夏海「じゃあ春樹のことお願いね。気をつけて来るんだよ」

冬馬「うん」

夏海、ドアを開けて家を出ようとする。

冬馬「夏海！」

夏海「ん？」

冬馬「大丈夫？　なんか悩んでるって春樹が

：

夏海「（無理して）あー！　うん、だいじょ

ぶだいじょぶ。じゃ！またあとでね」

夏海、ドアを閉めてから空を見上げる。

雲ひとつない晴天。

夏海「さ！　イベント頑張るぞ！」

○公園・イベント会場（朝）

テントがいくつも並び、それぞれ屋台の準備をしている。夏海、離れたところのテントに向かう。

○同・お弁当屋のテント（朝）

夏海「おはようございます！　いいお天気で

：

（目を見開く）どうしたんですかその

腕！」

千恵「片腕をギプスで固定している。

千恵「昨日階段踏み外してポッキリ……」

夏海「無理しないでください！　娘さんたち

も手伝いに来てくれることですし、千恵さ

んは家でゆっくり！　あれ、そういえば娘

さんたちまだ着いてないんですね」

千恵「さらに難しい顔をする。

千恵「それがね……昨日の夜連絡があって、

孫が保育園で風邪をもらってきたらしくて。

一家全員ダウンしてるって」

夏海「ええっ！？　大丈夫なんですか！？」

千恵「病院にも行って薬ももらえたみたい」

夏海「良かった……」

千恵「そんなわけだからね、私の腕もこんな

んだし、せっかく来てもらったけど、今回

の出店はキャンセルにしようと思って……」

夏海「そんな！　うちのお弁当知らない人た

ちにも楽しんでもらえるチャンスなんです

よ！」

千恵「でも私の腕もこんなだからいつものようにはいかないし、なっちゃんが大変になっちゃうよ」

※ ※ ※

（フラッシュ）

凜たち4人の顔。

春樹の声「ねえちゃんといっしょにバイトすればいいじゃん」

※ ※ ※

夏海M「ダメダメ！」

と、邪念を振り払うように首を横に振る。

夏海「私なら大丈夫です！だからやりましょ！うちの冬馬と春樹も楽しみにしてるんです」

と、ニツコリ。

千恵「なっちゃん……」

○同・会場全体

会場いっぱいのお客様。それぞれのテン

トの前には列ができています。

○同・さわむらキッチンの特ント

夏海「（叫ぶ）いらっしやいませー！」

千恵「（叫ぶ）人気ナンバーワンのスタミナ

丼はいかがですかー！」

弁当屋の前は閑散としている。

千恵「なかなかこっちの方まで人が来ないね

え」

夏海「千恵さん、ちょっとお店お願いしま

す！」

千恵「いいけど、どうしたの？」

夏海「私、あっちの方で呼び込みしてきま

す！」

夏海、スタミナ丼が写ったチラシを持って走って行く。

○同・会場入り口

凜、拓海、龍太郎、聖也が女子4人と前を通りかかる。看板には「肉フェス」

と。

龍太郎「肉フェスだって」

聖也「超いい匂いすんじゃない！　な、行って

みようぜ！」

女子1「えーカフェ行こうって話してたじゃ

ん」

女子2「ほら、どの屋台も並んでるよ」

拓海「あれ、本田さん？」

拓海の言葉に凜が反応する。

聖也「どこどこ？」

拓海、夏海がいる方向を指差す。

聖也「ほんとだ！」

女子3「ねえ、本田さんって誰？」

龍太郎「俺らのクラスメイト」

聖也「なんでこんなところいるんだろ」

拓海「本田さんのお弁当屋も出店してるっぽ

い」

凜、人混みの中で客引きする夏海を見つめる。

○同・メイン会場

夏海「へ明るく」スタミナ丼、いかがですか
「？」

と、チラシを配りながら客に声をかける。

肉串を食べながら歩く2人組が夏海に
近づく。

チャラ男1「ゴメン俺ら今腹いっぱい」

チャラ男2「でも連絡先教えてくれない？」

と、夏海の手首を握って詰め寄る。

夏海「すみません今仕事なので」

と、手をほどこいて立ち去ろうとする。

しかし諦めないチャラ男が今度は夏海

の肩を掴む。

チャラ男1「いいねえ。クールなコは嫌いじ

ゃないよ」

凜、チャラ男2の手首を掴む。

凜「……おい、失せろ」

チャラ男1「なんだなんだ？」

チャラ男2「テメエが離せよ」

凜、チャラ男の腕を捻り上げる。

チャラ男2「イテテテッ！ 分かった、分

かったよ！」

チャラ男たち、その場を離れる。

夏海、凜がいることに驚く。

夏海「ありがとうございます。また助けて

もらっちゃいましたね」

凜「：：毎回変なやつに絡まれすぎだろ」

夏海「へ苦笑」すみません……西山くん、ど

うしてここに？」

凜「：：たまたま通りかかった」

聖也「なっちゃーん！」

と、手を振りながら走ってくる。

龍太郎と拓海も一緒。

夏海「みなさん！」

拓海「本田さんさんの店も出店してたんだね」

夏海「はい」

龍太郎「すごい並んでんじゃね？ こんなと

こいて大丈夫なん？」

夏海、顔が暗くなる。

拓海「どうかした？」

夏海「それが……」

○同・会場入り口

女子たち、凜たちを見ながら、

女子1「なんなのぉー」

女子2「私たち置いてくとかマジありえな

い！」

女子3「もう知らない。行こ！」

と、会場を離れる。

○同・さわむらキッチンの特ント前

相変わらず弁当屋の前にだけ人は誰も

いない。

聖也「あちゃー」

龍太郎「これは……」

拓海「そもそも場所が不利だな」

夏海「（苦笑）ですよね……」

凜「……夏海」

夏海「ん？」

凜「予備の帽子とエプロンは？」

夏海「元々用意してたものがあるので4人分ありますけど……」

凜「それ貸して」

と、テントの方へ向かう。

夏海「えっ？」

聖也「よっしゃ！ 龍、一緒に呼び込みしようぜ！」

龍太郎「おうよ！」

拓海「じゃあ凜と俺は焼き担当だな」

と、歩いて行く。

夏海「あ、ちよつと……！」

と、追いかける。

千恵「あなたたちは……！」

聖也「おばちゃんども！」

龍太郎「人足りなくて困ってんだってな。俺

らが力貸すぜ」

拓海「帽子かぶってエプロン着れば、ほら悪

くないでしょ」

千恵「でも……」

凜、エプロンを着て帽子をかぶる。

凜「500食完売御礼。これなら文句ねえだろ？」

千恵、頷いて、

千恵「分かった。お願いするわ」

夏海「千恵さん！？」

聖也「よっしゃ！　いっちょかますぜ！」

○同・肉串屋台の前

龍太郎、列に並んでいる女子2人に話しかける。

龍太郎「なあなあお姉さん。待ってる間にコレどう？」

龍太郎、スプーンに乗ったスタミナ丼を渡す。

女性1「え、いいんですか？」

龍太郎「もちろん。ほら、隣のお姉さんも」

女性2「ありがとうございます」

女性たち、スプーンを口に運ぶ。

女性1「ん！　何これ美味しい！」

女性 2 「しかもこれ五穀米じゃない？ ヘル
シーだ」

龍太郎 「白米もあるんだけど、お姉さんたち
食事にも気遣ってるんだろうなあって。す
げー綺麗だからさ」

女性 1 「もお、おだてるのうまいねえ」

龍太郎 「本当のことっすよ。それよりお姉さ
んたち今日は2人で来たの？」

女性 2 「ううん。会社の同僚何人かと！ 男
性陣は向こうの方並んでるの」

龍太郎 「そうなんだ、実は俺、一番奥でこの
スタミナ井売ってんだけど、（小声で）こ
こだけの話、お客さん全然来なくて」

女性 2 「えー！こんなに美味しいのに」

龍太郎 「そうなんだよ！ このまま1個も売
れないと、今日のバイト代でないんすよ。
良かったら同僚さんと一緒に後で買いに来
てくれると嬉しいな」

女子 1 と女子 2 、顔を見合わせて、

女子 1 「分かった。後で行くね」

龍太郎、女子たちの肩に手を回して、
龍太郎「ありがとー！　（イケボで）待って
るよ」

女子たち、龍太郎に釘付け。

○同・飲食スペース

椅子とテーブルが並び、屋台のフード
を食べている人々。聖也、スポーツウ
ェアの男子グループのテーブルに近づ
く。

聖也「お、美味そうな食ってんな！」

男子たち、不審な目で聖也を見る。

聖也「でもそんなじゃ足りねえだろ？　陸
上やってんなら、もっとガツンと食わねー
と」

男子1「なんで陸上やってるって分かったん
すか？」

聖也「（ニコツと笑って）ん？　なんとなく
だよ」

男子2「食いたいけど、どこも高くて」

聖也「そんなお前らにピッタリな店があるぜ」

聖也、男子たちにスプーンを配る。

聖也「スタミナ丼。食ってみ」

男子たち、ひと口食べて、口々に「美味い」と声に出す。

聖也「だろ？ これくらいの容器に入ってて、500円で食えるから！ お前らにはコッソリ大盛りにしてやるよ！」

男子1「行ってみるか」

と、立ち上がる。

男子2「みんなも食う？」

男子たち「食う！」

聖也「よしっし！ 俺が連れてってやる！」

○同・さわむらキッチンの特ント前

店の前は長蛇の列。会話しながら待っている。

女子1「さっき声かけてくれた子もカッコよかったけど、肉焼いてるあの2人もイケメンじゃない？」

女子 2 「私右側の人がいい」

× × ×

ママ 1 「ねえ、あれってもしかしてこの間店

に来てた子達じゃない？」

ママ 2 「あー、あの入谷の？ じゃあさっき

話しかけてきたもの……」

ママ 1 「なんか雰囲気全然違ったから気づか

なかった」

ママ 2 「意外とちゃんとした子だったね」

× × ×

女性 1 「あ、龍くんだ！」

女性 2 「龍くん！」

と、手を振る。

龍太郎、手を振りながらテントの下へ。

○同・テントの中

凜と拓海が肉を焼き、夏海が商品準備、

千恵が座って会計を担当。

龍太郎と聖也も戻ってくる。

聖也「（小声で）なっちゃん。次の次に並ん

でる男子2人の注文、ちよつと大盛りにしてやってくれる？」

夏海「はい！もちろんです！」

凜「夏海、そろそろ焼ける」

夏海「はい！」

夏海、容器に白米を入れる。

凜、ヘラで焼いた肉を乗せる。

夏海が蓋を閉めて、

夏海「ありがとうございます！」

と、客に出来上がった丼を渡す。

○同・弁当屋のテントの前

冬馬と春樹が列に並んでいる。

春樹「スゲー！ねえちゃんの店一ばんなら

んでんじゃん！」

冬馬「ほんとだな」

冬馬、凜たちをじっと見る。

× × ×

冬馬たちの順番がくる。

夏海「冬馬、春樹！良かった、無事これた

んだね」

千恵「春樹！ おっきくなっただね。学校楽し

い？」

春樹「うん！ オレ2年生全員友達だからだか

ら！」

千恵「へえ。冬馬もまた一段とカッコよくな

って。部活頑張ってるんでしょ？」

冬馬「はい。レギュラーになりました」

龍太郎「もしかして、この2人がなっちゃん

の弟？」

夏海「はい。中学2年生の冬馬と、小学2年

生の春樹です」

冬馬「……どうも」

と、軽く頭を下げる。

春樹「にいちやんたちだれー？」

夏海「こら春樹！ そんな言い方失礼でし

よ！ みんなはねえちゃんのクラスメイト」

龍太郎「俺は龍太郎！」

聖也「俺聖也。聖也って呼んでいいぜ」

拓海「俺は拓海。よろしくな」

凜「（無愛想に）……凜」

冬馬、眉をしかめる。

夏海、冬馬にスタミナ井とお金を渡す。

夏海「はい。足りないかもしれないけど、2

人で好きなもの食べてね」

冬馬「大丈夫。俺のお小遣いで買うから。そ

れは夏海が使って」

夏海「ええ……でも……」

聖也「お前中2なのに偉いなあ」

と、冬馬の頭を撫でる。

冬馬「へ照れ臭そうに」別に普通だし……」

拓海「西山さん。ここは冬馬くんに甘えさせ

てもらいな」

夏海、頷いて、

夏海「ありがとね、冬馬」

春樹「にーちゃん早く！ オレおなかすい

た」

冬馬「はいはい」

夏海「気をつけてね」

冬馬たち、離れて行く。

龍太郎「弟たちすげーいい子じゃん」

聖也「なっちゃんかねえちゃんやってるのも

新鮮だった」

夏海「2人ともたくさん家のこと手伝ってく

れて、自慢の弟たちです」

千恵「お客さんの波もひと段落したし、みん

な休憩行ってきたいいよ。お腹すいたでし

よ」

夏海「私はさっき食べたので、みなさん先に

行ってきたください」

聖也「っしやあ！」

龍太郎「なんか色々買ってくるか」

拓海、凜をチラッと見て、

拓海「ごめん凜。俺先行ってきてい？」

凜「ああ」

拓海「じゃあ頼んだ！」

聖也、龍太郎、拓海がテントを出る。

千恵「ごめんなっちゃん。ちよっと店お願

い！」

夏海「はい！ 転ばないように気をつけてく

ださいね！」

客足が落ち着き手持ち無沙汰な2人。

夏海、凜の方を気にしている。

凜「……この間は悪かった……あんなこと言
って」

夏海「きつ、気にしないでください！ 私が

馴れ馴れしくしてしまったので……」

凜「……またいつでも来いよ。聖也とか話し
たがってるし。夏海が嫌じゃなければだけ

ど」

夏海、パツと顔を明るくして、

夏海「いいんですか！？」

凜、フツと笑って

凜「そんなに喜ぶことかよ」

夏海「だって！ 西山くんたちといると、私

楽しいんです！」

聖也の声「おい！ 買ってきたぞー！」

聖也、龍太郎、拓海が両手にフードを
抱えて戻ってくる。

夏海「あ！ おかえりなさい！」

と、手を振る。

凜、夏海の横顔を見て頬を緩める。

夏海 M「西山くんたちのおかげで、イベントは無事終了した」

○キッチンさわむら・店内（夜）

千恵「今日は本当にありがとう。これ、今日のバイト代だよ」

と、封筒を4つ凜たちに渡す。

龍太郎「おばちゃんマジで！？」

聖也「やったぜ！」

拓海「ありがとうございます」

凜「……あざっす」

千恵「私、あなたたちを見た目とか噂だけで判断して誤解してた。本当にごめんなさい」

と、頭を下げる。

聖也「いーってそんなの！」

拓海「噂も全部が間違ってるわけじゃないしな」

龍太郎「俺らワルだし」

と、笑う。

千恵「みんなさえ良ければ、またいつでも弁
当買いにきてちょうだい。オマケするよ」

聖也「くるくる！　ぜってえくる！」

夏海、ニコニコして見守る。

○大通り・歩道（夜）

聖也、龍太郎、拓海が前方を3人並ん
で歩く。後方には自転車を押している

夏海と凜が並んで歩く。

凜「…夏海」

と、立ち止まる。

夏海も止まって、

夏海「どうしたんですか？」

凜「ん」

と、夏海の前に手のひらを出す。

夏海「えっと…？」

夏海、おそるおそるお手のように凜の
手に自分の手を乗せる。凜、プツと吹
き出して、

凜「犬かよ」

夏海「え」

凜「違う、スマホ」

夏海「あー！ はい」

凜、夏海のスマホのロックを顔認証で解除して電話番号を入力し、夏海の耳に当てる。コール音の後、スマホから凜の声。凜も自分のスマホを耳に当てている。

凜「これ俺の番号だから。もし俺のことで絡まれたり、とにかく助けが必要な時はいつでも連絡しろ」

夏海「へ真面目に」ちなみに相談料って1回おいくらですか？ 分割払いは……？」

凜「プツ……やっぱ面白えわ夏海」

夏海「ええっ！？」

凜「いつかまとめて請求するから。ツケにし
　　といてやる」

夏海、にっこり笑って

夏海「はい！ お願いします」

聖也の声「おいおい2人とも！置いてくぞー」

夏海「はー！いい！」

と、叫ぶ。

夏海「行きましたよ、西山くん」

と、走って行く。

凜、口角を上げて夏海の後を追う。

（了）